

2 野 菜

項 目	作 業 内 容
<p>(1)いちごの管理</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○いちごの管理 ○露地野菜の定植準備 ○そらまめの今後の管理 ○たまねぎの最終追肥と防除 <p>3月下旬になると、気温や日射量の増大に伴ってハウス内の温度が上昇し、果実の軟化等の品質低下が起こりやすくなる。また、吸水量が増加するため、水管理が重要となる。</p> <p>ア 温度管理</p> <p>この時期は気温の変動が激しいため、天気を見ながら適切な温度管理に努める。換気扇のあるハウスでも、晴天時には 30℃を超える場合があるため、適宜、サイドを開放し温度の上がり過ぎを防ぐ。</p> <p>また、夜間の冷込みが予想される日には、夕方早めにハウスを閉め、保温に努める。</p> <p>イ 追肥とかん水</p> <p>[土耕栽培]</p> <p>地温の上昇に伴い肥効が高まるため、施肥量が多くなると草勢が強くなり、乱形果や障害果が発生しやすい。追肥は草勢や葉色を見ながら少量ずつ施用するとともに、果実の軟化を防ぐため、かん水は収穫後の午前中に行う。</p> <p>[高設栽培]</p> <p>気温の上昇に伴い株の吸水量が増大するため、水分不足にならないよう、必ず排液量を確認しながら給液を行う。培養土によっては、一度乾燥すると水をはじいて湿りにくくなることあるため、乾燥させないようにする。</p> <p>排液量は給液量の2割を目安とし、給液の回数や量を調節する。また、給液濃度はマニュアルに沿って設定するが、定期的に EC や pH 値を測定し、異常がないかチェックする。</p>



写真1 高設栽培の着果

項 目	作 業 内 容
<p>(2) 露地野菜の定植準備</p>	<p>ウ 収穫</p> <p>気温が上昇すると、過熟果や果実の傷み等が発生しやすいので、食味を損なわない程度にやや若採りとする。また、できるだけ気温の低い早朝に収穫するとともに、収穫後は予冷を行い、品質保持に努める。</p> <p>エ 病虫害防除等</p> <p>気温の上昇に伴い、うどんこ病、ハダニ類、アザミウマ類等の発生が多くなるので、ほ場をよく観察し、発生密度の低い初期の防除に努める。薬剤防除だけでなく、ハウス周辺の除草、老化葉や収穫の終わった果梗は早めに除去するなど、耕種的防除を併せて行うと効果的である。</p> <p>3月は菜種梅雨の時期でもあるため、ほ場準備は週間天気予報等を確認して効率的に行う。ポイントは、耕起後に降雨が続くとほ場が乾かず、畝立て等の作業が困難になるため、耕起から畝立てを素早く実施する。</p>
	<p>ア さといもの植付け</p> <p>植付け時期は全期マルチ栽培で3月下旬から4月上旬とする。</p> <p>乾燥に弱いため、容易に水が入られるほ場を選択する。また、連作障害を回避するためには3～4年の輪作が必要となる。</p> <div data-bbox="906 1032 1382 1451" data-label="Image"> </div> <p>種芋は病虫害の被害がなく、かぎ口が1つで頂芽が健全な子芋または孫芋で、1個 40～90 g のものを約 200 kg/10 a 準備する。病害予防のため定植前には種芋消毒を行う。</p> <p>ほ場に堆肥と苦土石灰を施用し、pH を 5.5～6.8 程度に調整しておく。畝幅は 110～120 cm で、植付けの深さは種芋の頂芽から地表面までで約 15 cm を確保する。</p> <p>イ 果菜類（トンネル・露地）のほ場準備</p> <p>4月中下旬に定植する、なす、きゅうり、すいか等の果菜類のトンネル栽培では、3月中にはほ場準備を行っておく。特に土づくりは、3月に雨天が続くことがあるので、前項と同様に、堆肥の施用や苦土石灰の散布などの作業は早めに行う。また、耕起後は、ほ場の周囲に必ず排水溝を整備しておく。</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(3) そらまめの今後の管理</p>	<p>3月は気温の上昇とともに生育旺盛となり、開花から着莢開始期を迎える。株元からの腋芽の発生が多くなるので、定期的に取り除く。誘引はL字仕立ての場合、分枝の伸長に合わせて高さ30 cm ごとに誘引ひもを張り、分枝がぐらつかないように固定する。</p> <p>また、病害虫の発生が多くなるので、適期防除を行う。アブラムシ類はウイルス病を媒介するので初期防除を徹底する。赤色斑点病は降雨前の予防散布に努める。</p> <div data-bbox="815 286 1369 701" data-label="Image"> </div> <p>写真3 そらまめの誘引 (1条L字整枝)</p> <p>(4) たまねぎの最終追肥と防除</p> <p>県内では貯蔵用の晩生品種の栽培が多く、球の肥大後期まで肥料が吸収されるが、球の窒素含量が高くなると収穫後に腐敗しやすくなる。このため、最終の追肥は遅くとも3月中旬までに、窒素成分で約4 kg/10 a とし、貯蔵性の低下を防ぐ。</p> <p>また、たまねぎの主要病害である白色疫病やべと病は、排水不良のほ場で発生が多いため、降雨後は排水溝を補修するとともに早期発見や早期防除に努める。</p>

(作成 農林水産研究所)